

戸隠神社

あをがき

青垣

令和元年[増刊夏号]

戸隠神社発行
〒381-4101
長野県長野市戸隠3506
026-254-2001
<http://togakushi-jinja.jp>

戸隠神社 御神籤ものがたり (その二)

戸隠神社の御神籤の
改定の歴史は大いに
ドラマを含んでいる――

おみくじのルーツをたどれば、円仁・円珍らの天台僧が唐からもたらした一つの流れがある。その後、その験力から降魔大師・角大師とも呼ばれた元三大師こと良源により、平安期に整えられた。良源は、如意輪観音の生まれ変わりと信じられ、そのためおみくじは観音籤とも呼ばれる。今日までお寺でひかれてきた。

明治維新までお寺だった戸隠でも、この観音籤がもちいられてきた。戸隠神社となって以降、お寺の時代の観音籤を改める必要性が生じ、現在ご参拝の皆様の手渡されている御神籤へ続く改定の努力がなされた。

本紙第十号「御神籤ものがたり(その一)」をご覧いただきたい。第二面の図⑥に〈岩井清臣〉という名前が見てとれる。この人物こそ、おみくじをはじめとする明治維新直後の戸隠神社改革に携わったと考えられる。その波乱に満ちた生涯を見ていこう。

清臣の評伝は多くはない。そこで大濱徹也氏「佐藤清臣小伝——ある草莽の生涯をめぐる——」(一九六三年)を標に辿ってみよう。

佐藤清臣は、姓を高橋、大関、三浦、藤原、岩井(武州氷川神社神主)のち佐藤に復し、名は、秀波、穂波、倭文雄などと称し、明治期に清臣と改めた。戸隠滞在時は岩井清臣時代となる。

美濃国大野郡や三河国渥美郡などをその所領とした大垣藩の支藩大垣新田藩の人である。天保四年(一八三三)江戸の桜田にあった藩邸の生まれとされる。天保十三年に母、十四年に父を相次いで亡くした。「我皇州ノ大君主トマスハ天皇也」と「勤王ノ忠」を貴ぶ祖父公憲の薫陶の下に育てられ、その勤王の精神を継承した。幕末の志士と同様、尊王思想を底流とする藩論の統一と兵制の刷新など藩政改革を目指したようである。幕藩体制を否定する

この行動は、藩論をまとめるには至らず、嘉永五(一八五二)年、自ら脱藩した。

清臣二十歳、心は希望に満ちていたか、「劔ヲ以テ四方ニ遊ブ」として、文久年間までに駿河・越後・能登・越中・信濃(安政四年(五年)・遠江・駿河を訪れている。各地での活動の拠点は神社が中心で、各地に少なからず門人もいた。

時代は文久に入り、列強諸国との衝突、公武合体から攘夷への流れの中で、清臣は再び各地を旅している。諸国神社への攘夷祈願も旅の目的で、旅程は、携えた集印帳から推測できるようである。今や国民的ブームとなったご朱印帳のルーツを見るようだ。

文久三年の旅は、美濃(信州伊那郡・諏訪)・甲斐巨摩郡・山梨郡(遠江)・三河(尾張)と続く。

この年、清臣は平田門人となった。すでに平田篤胤は没していたが、平田国学に基づく藩論の統一に挫折、脱藩してなお、平田学の原理を貫いてきた帰結であろう。同じ年の入門者に島崎藤村の父で、小説『夜明け前』の青山半蔵のモデルとして知られる島崎正樹がいる。

平田篤胤は膨大な著作を残した。古典はもとより諸宗教、天文曆学、易学、医学から神代文字、幽冥界にまで及ぶ、いわゆる平田学。清臣は大いに吸収していたに違いない。慶応二年には諏訪にて平田国学の普及に努め、古事記の講義、和歌の歌作指導を行っている。これらは戸隠のおみくじ改定の

出づる厳定

悪魔降伏



降魔大師御札 比叡山元三大師堂 提供

歴史に多大な影響をもたらしたことは容易に推測できる。



平田篤胤門人姓名録 国立国会図書館蔵

慶応三年、勤王の士である清臣は、王政復古の大号令のもと、京より東山道を進み赤報隊に合流した。隊長を務める相楽総三さがら そうぞうとは、脱藩後の旅で親交を深めていた。赤報隊の進む先は清臣の予てよりの活動域であり、道案内、偵察はまことに適任であった。しかし

時の猶予もなく赤報隊は偽官軍と見なされ、相樂総三らは信州下諏訪で処刑された。本隊を離れ、諸藩の情報収集に当たっていた清臣は、捕らわれることなく、身を隠すこととなる。清臣のこの行為は、赤報隊から見れば裏切りと見なされ、世間からは赤報隊の構成員の汚名を着せられた。

逃れるように、平田門人の多い地へ向かった清臣は、平田鉄胤の紹介などにより明治元年から四年にかけて武蔵水川神社（武蔵水川神社神主 岩井清臣）はじめ各地の神社で学師として社事改革に当たっている。戸隠では十五名が清臣に入門、明治三年「戸隠神社和談書」「社家制法御高札」を制定したようである。それらはその後の火災で焼失してしまい、残念ながら現存しない。

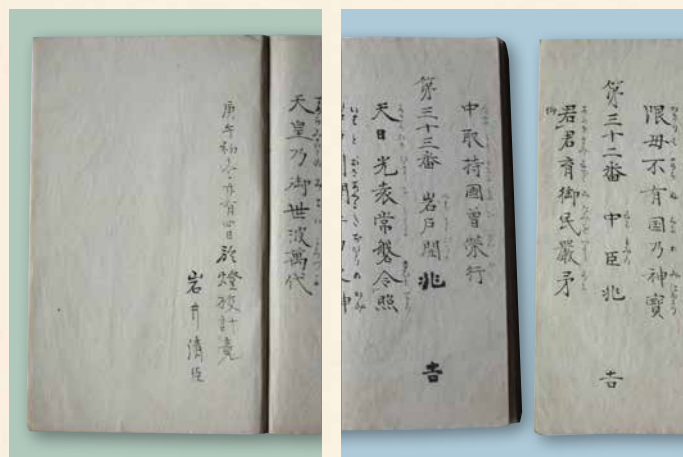
武蔵国	相模国	信濃国	戸隠郡	越後郡	美濃郡	甲斐国	その他
明治元年	13						
同二年	6	24					
同三年	15	5	15	1			
同四年				4	1		
同十年						3	
計	21	24	13	5	1	4	3

明治初期の清臣の門人分布

戸隠を後にした清臣は、終生の地となる三河国稲橋（愛知県北設楽郡稲橋村、その後稲武町、現在は豊橋市に編入されている）で、富村構想実現に向けて、国学をもとに、神祇制度の普及につとめた。また、当時は新政府による学制頒布前であったが、村民教化のため農業や物産といった実学に重きをお

く学校の設立に努めた。北設楽郡の神職界でも主要な地位を占め、特に神道国教化のために設置された教導職の小教生を授けられている。

やがて学制頒布により公立となった学校では算術が重視されるようになり、神道の国教化についても、仏教、キリスト教、教派神道はじめ内外の圧力により信教の自由が認められ、実現



戸隠神社おみくじ（和歌）原稿控 戸隠神社聚長 宮澤家蔵

することはなかつた。

清臣の心中はいかがであつたろう。

晩年は、稲橋の神官として神明奉仕に勤しむ傍ら詠歌や書に親しみ静かな日々を過ごしたようだ。明治四十三年、七十八歳の波乱に満ちた生涯を閉じた。

君を仰ぎ御民を育てて 嚴矛 中取持
 てる国ぞ榮行く

当神社のおみくじにある和歌である。富村を目指し、民衆に寄り添った清臣の目指した国造りとは、このようなものではなかったか。

清臣の生涯と、当神社おみくじの改定。この二つが、明治維新により、奇しくもクロスした。

上段の資料は、明治三年、現在のおみくじの原点ともいえる神々の物語にちなんだ和歌を、当神社社家の宮澤瑞穂氏が控えたものである。

改定後のおみくじは、これらの和歌を柱として、吉凶をはじめ和歌の解釈、信心すべき神様、方位、待ち人、旅立ち、家造り、引越し、縁談、商い、失せ物、訴訟事、生死などについて戸隠の大神様より示される。

清臣が、その改定にあたり、自らがつちか
 培った平田学を惜しみなく注いだことは
 間違いないだろう。

当神社のおみくじを巡る考察は、清臣や平田学との関わりの研究によつて更に深まつていくに違いない。

「あをがき」バックナンバーは当神社ホームページからも閲覧が可能です